

# UIFA JAP●N

## NEWSLETTER

### ■主な内容

de la Tour UIFA 会長からの便り  
アルゼンチンからの便り Graciela Schmidt  
海外交流の会 遠藤楽さんのお話  
「F. L. ライトと明日館」  
連続企画 広がるレースワーク 5  
トルコ大地震の被災地を訪ねて 松川淳子

「風の道」まちづくりと藤前干潟ツアー 須永淑子  
DOCOMOMO の活動をご存知ですか? 山名善之  
フランス・モダニズム建築の保存と DOCOMOMO FRANCE  
ちよつとひと言 ユニバーサルデザインを考える「眼鏡」中村陽子  
役員会報告

### ◆Solange d'Herbez de la Tour UIFA 会長からの便り

Paris, 3 January 2000

My dear Junko,

I am sending you this fax to wish you, to Nabuko I, to Nabuko II and to all my good friends in Japan, as my personal messenger :

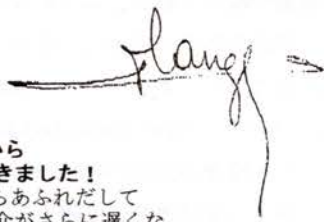
A very good and prosperous New Year 2000, with good health and hapiness, and.... to be able to visit Paris. (informing me on time of your plans and when you could be able to come).

The disaster which overcame Paris and France recently, with the wind tempest and so one, has produced many damages for many people, not only materials. I had there fore to stay in Paris, to inspect my (works in progress) to see haw much was damaged and to make urgent repairs for security.

For this rason my greetings were delayed and y am sending then you through this fax.

Love,

Solange d'Herbez de la Tour



ドラトウールUIFA 会長から  
ちよつと遅い年賀状が届きました!  
1月のニューズレターからあふれだして  
しまっているため、ご紹介がさらに遅くな  
りました。パリを襲った嵐で被害がたくさん出て、被害状  
況調査や復旧のために忙しいことなどを伝えながら「2000  
年の健康と幸福、繁栄を」と書かれています。  
(次の大会までの UIFA 事務局長: 松川淳子)

### ◆アルゼンチンからの便り

DEVELOPMENT OF OUR SUBJECT AFTER THE  
CONGRESS Ines Guemberena Graciela Schmidt

" At dawn , armed with burning patience ,  
we shall enter the splendid cities."

Arthur Rimbaud

Our subject at the UIFA ' 98 Congress , " City-maker Women" focused on the work of women in the construcion of the "informal city ".Right now , carrying on our project " Woman and City " , and in agreement with the objectives of UIFA , our Women Architects Commission of the College of Architects of Rosario are researching on the presence of women in the "formal city".In this respect , we are integrated to the network "Woman & Habitat " for Latin America , and to the Forum of Feminist Politics , Madrid , Spain , with whom we keep ideas and infomation interchange.

We intend to organise an involvement exercise in our profession , in orden to reflect , share ideas and propose changes with a gender vision .

We are not only interested in the subject of private housing, but also in the design of the urban space , in order to make the presence and permanence of women easier , to render it more democratic , so that its use and benefit becomes fairer.

We hope to contribute to the definition of a new philosophy of land use planning , which will enable the city to become a source of shared culture .To achieve these objectives , we started to work in collaboration with the Municipality (local government ) of Rosario through its Adviser Council of the Women's Department , of which we coordinate the Habitat & Environment area.The work deals with the "Equal Opportunities Programme in the city of Rosario for the years 2000-2004" Its first diagnosis stage was carried out , and comprised three chapters:  
a) Statistical analysis of the Permanent Survey of Homes  
b) Opinion polls , with analysis of results ..  
c) Diagnosis participatory workshops.

The scope was to learn about actual situations and needs that determine daily life of women in Rosario . Results show obedience to cultural stereotypes , guilty feelings for not taking enough care of their families , preconceived ides about themselves and their actions , and bare contradictions between reality and perceptions of the involved women themselves.

The final objective is to know the universe of our city in this respect, in order to obtain a general framework in which to insert the peculiar , varied and rich craft of the women architects.

## ■海外交流の会

建築とは何か、建築家とは何かを問われた！

「F.L.ライトと明日館」建築家 遠藤 楽さん



1927年生まれ。東京都出身。自由学園卒業。1957年～58年にかけて、フランク・ロイド・ライトのもとで学ぶ。訳書に『ライトの住宅』『ライトの生涯』他。

20世紀最後のミレニアムイヤーの開幕、第20回海外交流の会には、20世紀の巨匠建築家フランク・ロイド・ライト研究の第一人者建築家遠藤楽氏をお招きした。

「F.L.ライトと明日館」についての講演と1997年重要文化財指定を受け、現在、修復復元中の自由学園明日館の見学とを2日間にわたり開催した。特に見学には、多忙な中、ご自身で解説下さり、厳冬の下で会員と親しく交流できた。遠藤楽氏のライトに対する深い敬愛の念と、氏の心暖まるお人柄の一端接することができ、感謝に堪えなかった。

### 自由学園明日館の見学

2月18日に明日館を見学した。人数制限もあったが、30名の参加。寒空の下、吉岡館長の熱心な説明に始まり、現場をめぐりながらの遠藤氏ご自身の説明へと続いた。大正10年、氏の父上遠藤新氏とライトの共同設計で明日館ができた経緯、設計から竣工までわずか4ヶ月のスピード学校建築、当時、旧帝国大学ホテル建設途上の様々な難題を抱えていたライトは、羽仁夫妻の崇高な自由学園建学精神と信念に打たれ設計を引き受け、弟子の遠藤新氏と共同設計（ライトにとっては初めての共同設計）したことは、ライトにとり異例だったこと。当時アメリカで開発された”2×4”工法技術を一部取り入れた日本在来の木の構造は、まさに日米合作の賜といえること。シンプルでかつ経済的な設計。全半解体したから分かった数々の構造のディテール。屋根や樋に至る設備、素材の美と用、何をどう取捨選択し実現したか等々、目に見えない過程を想像できる。解体末期に外部から見学したからこそわかることだった。これから、内外の修復期に入るが、完成が実に楽しみだ。

### 自由学園建築にみる建築家ライト

ご自身も父親同様、晩年最後のライトの弟子で、ライ



解体中の明日館をバックに  
左から吉岡館長、小川UIFA会長、遠藤楽先生



参加者一同、遠藤楽先生を囲んで



柱と土台の構造

トを彷彿とさせる紳士そのもの。提供下さったたくさんの資料の中には、ご自身で作成したアメリカ史の年表がある。ライトの生涯や業績を模索研究するとき、アメリカの開拓や政治・経済、人との交流など、ライトが生き抜いた背景を知る上でとても貴重な資料だ。自由学園完成時に寄せられたF.L.ライトと遠藤新氏との手紙の原文と訳。一その名の自由学園にふさわしく自由なる心こそ、此の小さき校舎の意匠の貴重一働き乙女等は、此の建築より、将来の生活恩料の基礎を堅めるに役立つような、美と友愛との何者かを見出し、何者かを学び得るに違いない—生徒はいかにも、校舎に咲いた花にも見えます。

## ■連載企画 広がるレースワーク 5

UIFA 国際女性建築家会議第 12 回日本大会のその後

### トルコ大地震の被災地を訪ねて

——遠いトルコ、近いトルコ

松川 淳子



屋根と開口部



柱と界壁の構造



ライトのイス

木も花も本来一つ。その様に校舎も生徒もまた一つと一。

また、F.L.ライト展のパネル説明写真、そして、ライトの数々の思想や大自然によせる彼のポリシー、「建築家は、あくまで自然の観察者であり、それを建築の中に取り入れ、科学の実証に先んじてこれを知覚し、常に大自然を友として親しく関わり合い—そして建築家は、自らの”創意”を大自然から学びとれる”詩心”を養うべきで、それは優れた建築家の資質である」と。また、明日館や F.L.ライトの住宅見学のスライドをはじめ、氏が親しく交流されておられるからこそその落水荘やその他多数の住宅、手造りの友人の住宅まで拝見できた。

最後に、老子の言葉からライトが引用した彼の好きな 3 行詩が、タリアセン・ウエスト Theater 後部の壁に書かれている言葉を紹介された。

—The reality of the building does not consist in the roof and walls but in the space within to be live in.

長時間にわたり熱心に語りかけて下さったことは、私たちが巨匠 F.L.ライトに少しでも近づき、「建築とは」、「建築家とは」を真摯に問われたひとときで、とても有意義な会であった。

遠藤楽氏訳「ライトの生涯」オルギヴァンナ・L・ライト著と「ライトの住宅」—自然・人間・建築 (各彰国社刊) (正宗量子)

支援を被災地で考えたい

1999 年 11 月 21 日、私は、成田発イスタンブール行便の機中にいた。かばんの中には、9 月初めに設立した「トルコ復興支援実行委員会」の第 1 次緊急支援活動・簡易トイレを被災地に送ったときのポスター、第 2 次支援活動としてモニタリング最中の「テントの冬対策」が入っている。地震発生 2 週間前の 7 月 25 日、国営昭和記念公園で行われた「防災サバイバル・キャンプ・イン'99」で、仮設テントのコンペティションに参加していたトルコからの研究者と友人になったことが始まりで、大地震の発生、支援活動の模索、建築・都市計画の仕事に関係しているプランナーたちで立ち上げた「トルコ復興支援実行委員会」による支援活動の本格化、活動の広がりと共に入ってくる被災地や支援活動に関する夥しい情報、と、4 ヶ月足らずの間に起こった事態のめまぐるしい展開は、思いもしなかった形で私の幼い頃の憧れの国・トルコを身近な現実の国へと変えた。

「トルコの大学の研究者たちと復興関連の計画を検討するために、建築学会が調査団を出すから」というお誘いを受けてすぐ参加する気になったのも、支援活動のこの先で何を考えればいいのかを、被災地の中で考えたいと思ったからに他ならない。

いよいよそのトルコが目前にある。空港で両替した 0 の数ばかり多いトルコリラを眺めながら、出来ることなど何かあるのだろうか、という不安な思いもしてくるのだった。

イスタンブール工科大学、中東工科大学で、建築学科の教授たちとのワークショップに参加し、復興関連の計画についてアイディアを交換したこと、コジャエリ県副知事、デリンジェ市助役、公共事業住宅省の災害対策本部長にお話を伺ったこと、3 つのテント村を訪ねたこと、続げさまの被災にもめげず、明るく親切だったトルコの人々のこと、地震とは一見無関係のような美しいモスクの夜景のことなど、1 週間ほどの短い期間に、駆け足で歩いた調査団の行程に沿って見聞し学んだことは、ここに書き尽くせるものではないので、実行委員会の支援活



これから給食！給食所付近で イズミット市



11月の第2次震災の被災地で



テント村の水飲み場は立派だ！イズミット市



テント村の「子どもの家」



マルマラ大学の学生を中心としたボランティアグループ

動のテーマー「水場」と「テントの冬対策」に沿って、3ヶ所ほどのテント村を訪問してみたことを中心に紹介してみたい。

#### 工夫を凝らした自力建設のテント

テントの環境はほぼ4つに分類される。規模の順にあげると、自宅付近に任意で建設された個別の小さなテント、公共施設のへりなどに自力で建てられたテントの集合、公園等ある程度大規模な敷地に自力または民間の支援などで建設された大規模テント村、公共空地や運動施設などに軍隊によって建設され、管理される大規模テント村の4タイプである。

工夫を凝らした自力建設のテントは大変参考になった。中でも、アタチュルク森林公園の自力テント村は、100基近いテントが並ぶもので、テントも、ありあわせの材料を集めてフレームを組み、シートをかぶせてテントとしたいわば「在来工法」風のものの、角材を横に積み重ねて壁をつくり、屋根を架ける「ログハウス」風のものの、耕運機の荷台の上に小屋を組んで乗せた「モービルハウス」風のものの、本物のトレーラーハウスを利用したものなど、多彩なタイプがあり、大変興味深く、参考にもなった。いずれもストーブを設置し、外に出した煙突から煙が立ち上っていた。寒さに備え、急ピッチで防寒の工夫を重ねているようだった。水場は公園の公衆用トイレや洗面所を使っているようにみえた。

コジャエリ市やボル市で見た軍隊が建設・管理する大規模なテント村は、立派なものだった。スチールでアーチ状にフレームを組み、厚い断熱性のシートをそこに

張る方式でかまぼこ兵舎型のテントをつくるもので、床には土間コンを打ち、じゅうたんを敷いている。

内部にはストーブ、テレビ、ベッドなどが置かれ、なかなか快適そうだった。特に感心したのは、この、1000基を超えるテントを擁したテント村には、トイレ、シャワールーム、洗濯場、床屋、給食所等の生活必需施設はもとより、小学校、子どもの家、図書館等の教育文化施設、診療所、メンタルケアセンター等医療施設、体育館等スポーツ娯楽施設、街路樹までがそろって、きちんとゾーニングされ、ひとつのまち一都市をつくり出していることだった。また、どのテント村でも水場が清潔でいやな匂いや汚れが全くないことも不思議なほどだった。

#### トルコの暮らしを営むテント生活に学ぶ

乾燥の程度や敷地の広さに差があるとはいえ、日本が学ばなければならないことはたくさんあるように思われる。仮設住宅より更に短命であるはずのテントでの生活も、「ただ寝るところだけ作ればいい」と考えないで、暮らしを営むまちをつくらうとする姿勢は本当に立派だと思った。

限られた期間に大急ぎで歩いた被災地の惨状は、思い出すたびに悲しい気持ちになるが、出会った人が皆親切で、明るい顔で事態に対処していたのは救いだった。大したことでなくても、可能な限り現地のニーズに沿いながら出来ることを出来るときにしていこうという気持ちを強くした。高齢化や国際化が一層深化する21世紀の日本社会で、共に生き、共に暮らすまちを創ることを私たちは改めて確認しなければならないであろう。

## “風の道”まちづくりと藤前干潟見学ツアー

昨年11年11月20日、名古屋の中川を事例とした「風の道」まちづくりを紹介してくださった向井愛さんと、その恩師である名古屋工業大学の堀越哲美先生、院生の宇野勇治さんの案内で、川が主役の街づくりを実際にみせていただきました。朝10時30分、名古屋ポストン美術館もある金山南ビル内の（財）名古屋都市センターに集合。このセンターは、名古屋都市整備公社が開発したビルの11階から14階を市から借り、基本財産10億円を基に、調査・研究、情報収集・提供、人材育成・交流を主要事業としている財団です。

まず、名古屋都市センターが関与している事例を、研究員の羽根田英樹さんと杉野みどりさんに紹介していただきました。ここでは名古屋市から出向した職員や1年任期の市民研究員が研究や活動を行っています。市民研究員の中には「堀川とまちづくりを考える会」の代表もいて、堀川流域で活動している市民団体の黒川ドリム会、堀川まつり実行委員会、広小路セントラルエリア活性化協議会などと水辺のネットワークを作り、昨年9月には川の清掃や街づくりシンポジウムを行いました。

それまで「川で遊ばない」とあった看板を、「良い子はぜひここで遊ぼう」と変えたいというのがねらいだそうです。庄内川から水を引き込む要請の署名活動も行い、事務局を名古屋都市センターに置く堀川協議会（仮称）も作りました。「しかし行政のマスタープランと市民の意識に乖離はないのか」というこちらからの問いには「宅地側と河川側を一体で整備したい。目立つ所や、やりやすい所から行政指導で川岸の整備を行っていく」との返答がありました。

また、名古屋都市センター内には、街づくりに取り組む市民グループの交流や活動を支援するための会議室やライブラリーもあります。博士課程以上の人には年間150万円の研究費とともに研究室が用意されるなど、恵まれた環境に訪れた皆は感心することしきり。「まちづくり広場」の床には、名古屋市全体を見渡せる航空写真が張られていて、それを空からみたつもりでこれから見学する地域や場所の説明を受けました。

11時30分から見学に出発です。藤前干潟はあいにく潮が満ちていましたが、たまたまそこに居合わせた「藤前干潟を守る会」の辻安雄さんが、干潟の見える状態の写真を見せながら説明して下さいました。辻さんの望遠鏡で、遠くの鳥や飛び跳ねるボラも見ることができまし



藤前干潟で



「風の道」のある街並み

た。新川と庄内川の合流点に残された集落、下之一色では、街の構造と築後80年以上経つという民家を見学しました。昔魚屋だったという家は、当時としてはハイグレードな造作だったと思われます。伊勢湾台風にも水をかぶらなかったこの地域は今、スーパー堤防の建設のために埋め立てられる運命だということでした。

次に訪れたのは、堀川沿いにある倉から一本内側に入った長屋群、四間道（しけみち）です。入口の屋根の上に屋根神様という小さな社が載せられていました。長屋の奥は袋小路となっていて、門所（けっしょ）と言う昔のスタイルが残されていました。軒の低い家並みのその一画は、300年前にタイムスリップしたような気がしました。

最後は、庶民の街から白壁という屋敷街へ移動です。市の文化財、井元家住宅が榎木館（しゅもくかん）という喫茶店になっていました。こうしたところが周辺地域に多く残されているそうです。凝った造りの屋敷内を見学。ここが見学会最終地点となりました。

今回は、地域に詳しい人の案内でないと絶対に行けないような場所を見せていただき、しかもその意味も説明していただけて、充実した見学会となりました。参加メンバーにとっては、名古屋再発見のいい機会となったことと思います。

（須永 俣子）

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5  
麹町E・C・Kビル (株)生活構造研究所内  
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866  
メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

DOCOMOMO の活動をご存知ですか？

寄稿  
フランス・モダニズム建築の保存と DOCOMOMO FRANCE  
山名善之 フランス国立ナント建築大学非常勤講師

モダニズム建築の名作が多く生み出されてから 3/4 世紀以上が過ぎ、その保存改修がフランスにおいて課題となつてからすでに 30 年以上が経過している。フランスのドコモモのフランス支部では、ドコモモ本部（オランダ）とほぼ同時、1989 年に設立され活動を続けている。

フランスはパリの中央政府を中心とした中央集権の国であることは有名であるが、とくに文化省による文化財保護はその典型でもある。ここで重要になってくるのが、ドコモモの全国に広がるネットワークと構成メンバーの豊富さである。モダニズム建築に関心をよせる人々、それらは建築家だけではなくエンジニア、行政官、修復建築家、歴史家、大学関係者といったように様々な領域に及ぶが、この人々の多様さがドコモモの活動に活力をあたえている。どの建築作品を保存し、改修を施さなくては行けないのか。経済的、技術的にどの様にそれを実現させていくのか。文化省の複雑な手続きをどの様にするか等々にドコモモが手助けをしている。

ほぼ同時期に、同じ様な材料を使って、世界各地につくられたモダニズム建築は、現在、各地でその保存改修という問題に直面している。例えば、複数の国の改修関係者らが参加して、コンクリート改修について話し合うなどの技術報告会なども行われている。このようなヨーロッパ内の意見交換はドコモモ・インターナショナルが企画し頻繁に行われる。このような国のレベルを越えた意見交換の機会は各国の参加者にとって励ましとなつたり競争心を生んだり、貴重な場となっている。

来年迎える 21 世紀の到来とともに、20 世紀の貴重な文化遺産であるモダニズム建築の保存修復の課題は各国に於いて現実の課題となり、その活動の手助けをするドコモモという国際的ネットワークがますます重要となつてくるであろう。

現在、ドコモモ国際会議の時期にあわせたブラジルツアーを建築家の連健夫さんが企画中です。ご興味をお持ちの方は下記にお問い合わせ下さい。

問い合わせ先は、

連健夫建築研究室 担当：連健夫、渡辺研司  
東京都渋谷区桜丘町 12-8-209  
TEL 03-5456-5134 FAX 03-5456-5160

この指とまれ 「セナさんの本を読む会」

「セナさんの本を読む会」は 4 月 8 日（土）の会で 13 回になります。次号のニュースレターではその活動の様子を詳しくご紹介させていただきますが、主として青山のウィメンズプラザのフリースペースで、6 人の参加者が協力しながら読み進めていますので、ご興味をお持ちの方はぜひお立ち下さい

ちょっとひと言

ユニバーサルデザインを考える 「眼鏡」

ユニバーサルデザインとはどのようなものでしょうと、「住環境デザイナー」の「嶋 佐知子」さんに伺ったことがあります。彼女は眼鏡が良い例であると教えてくれました。

眼鏡はフレームとレンズという二つの組み合わせからなっています。顔型にあった、ファッションブルな、デザインされたたくさんのフレームがあり、自分の好みにあったものを選ぶことができます。一方レンズの方も一人一人の「障害」の程度に合わせて調整することが可能です。この二つの組み合わせがあることによって、自分にあった眼鏡を楽しんで利用することができます。

大きな機能を満たす基本と、各人個別のニーズに合わせることでできるシステムを持つ眼鏡の基本的なデザインが、本来は福祉用具でありながら、誰もが持ちたがる商品にしたのでしよう。（中村陽子）

役員会報告

第 10 回：1 月 11 日

出席者：小川、松川、小渡、東、山田、正宗、渡辺

・ E メールアドレス変更：新アドレス uifa@LIQL.CO.JP

・ 第 20 回海外交流の会：F.L. ライトの見学

日時：2 月 18 日（金）12 時～2 月 19 日（土）14 時～

講師：遠藤 楽氏「ライトと明日館」

・ 来年度予算について：各担当より予算案提出

第 11 回：2 月 14 日

出席者：中原、小川、飯島、松川、小渡、峯、山田、正宗、田中、渡辺

・ 第 20 回海外交流の会

申し込み状況：見学会 33 名、講演会 27 名

記録は広報主体、記録保管は事業担当

・ 会計報告：1999 年度一般会計見込み収支報告

2000 年度一般会計収支予算書

■広報日より

トルコ大地震の被災地、遠藤楽氏と自由学園明日館、名古屋の「風の道」まちづくりと、今号も様々な建築に関する事柄を取り上げました。UIFA 会員の声の発信地としてニュースレターが十分に機能するよう、皆さまの「声」をお寄せ下さい。

ここで私から発信—4 月から、長崎出島の復元建物 5 棟がオープンします。それに関連して「海を渡った大工道具展」が長崎、神戸、横浜などで巡回します。ぜひ、ご覧になって下さい。（編集長：田中厚子 編集担当：飯島静江、渡辺喜代美、中村陽子、井出幸子、大高真紀子、須永淑子）